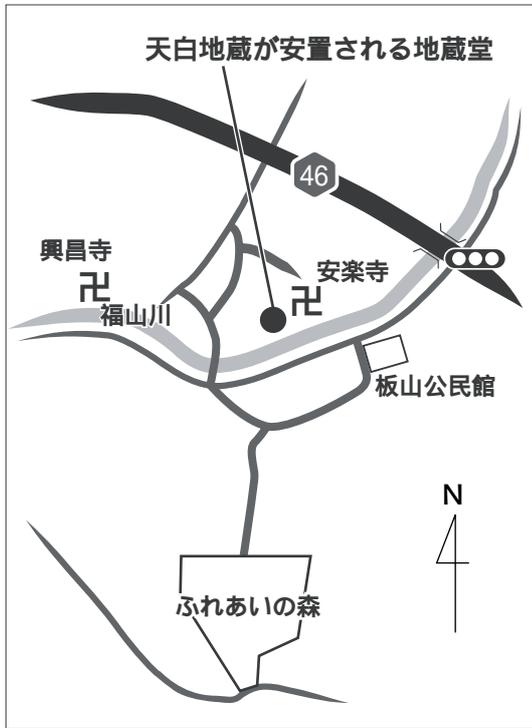




シリーズ

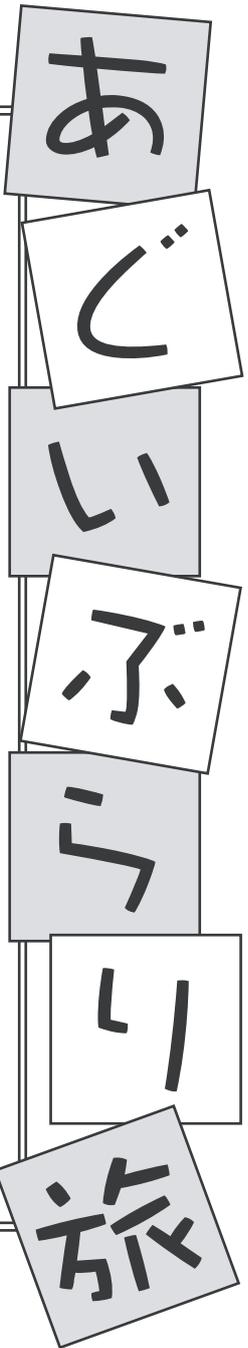
阿久比を歩く ④⑥



正面奥の厨子に「天白地藏」が安置されている

「わしものう、耳が遠なつたこと
があつたけど、天白地藏さんにお参
りさしてもらつたら、よう聞こえる
よになつた。おまはんも、柄杓の
底に穴をあけたのを持つて、安楽寺
へ行つてお参りしたがええがの。」
おばあさんは大喜びで、早速新し
い柄杓に穴をあけたのを一本と、大
きな巾着にお供えの米を詰めて、安
楽寺へ行きました。
和尚さんが地蔵堂の扉を開けて、

伝説の地を歩く(天白地藏)



お祈りをし、「さあ、その柄杓でよう
く耳をなでて、お地藏様の前に置き
なされ。きつとお地藏様がかえって
くださるからな。一週間、毎日お参
りに来なざるがいい。」
おばあさんは、毎日新しい柄杓を
持つて、七日間お参りしました。七
日目に耳をなでると、柄杓の穴から
スーッと風が入ってきたような気が
しました。そしてそれから、昔の
ように耳がよく聞こえるようになり
ました。「阿久比の昔話 天白地藏」
から。」
天白地藏がまつられる安楽寺(板
山)を訪れた。地藏はその昔、福山
川上流にあつた地藏池の堤に立つて
いた。大雨が降ると池の水があふれ
て福山川へ流れ込み川の堤防が切れ
た。地藏は堤防が切れるたびに「天
白」の地へたどり着く。村人たちは
天白の川の堤に小さなお堂を作り、
地藏をまつる。その後は福山川の堤
防も切れなくなる。村人は「天白地
蔵」と呼び、耳の不自由な人が、穴
の開いた柄杓を供えて祈ると耳が聞

こえるようになったという話が伝え
られる。
天白地藏は明治六年から安楽寺で
まつられている。境内西にある地藏
堂奥の厨子に納められ、姿を見るこ
とができない。一度だけ見ましたが
顔の形はなくなつてしまい、見た目
は木のかたまりで、言われなければ
お地藏さんとは分かりません。穴の
開いた柄杓を供えたのは、すくつた
水が通り抜けていくのと、耳がよく
通るといふ意味が掛けてあつたよう
です。今は柄杓を供えてお参りする
人はいませんが、話を聞いて遠方か
ら手を合わせに来る人がいますよ。
案内してくれたお庫裏さんが教えて
くれた。
寺へ参拝に来ていた夫婦に声を掛
ける。天白地藏の存在を知らない二
人に私たちがいわれを話す。「毎月お
参りに来ますが、お地藏さんにそん
な不思議な力があるとは知りませ
んでした。少し耳が遠いおばあちゃん
の知り合いがいるから今度教えてあ
げようかなあ」と奥さんが言葉を残
してその場を離れて行った。
「おばあちゃん耳が聞こえるよう
になるといいですね」と友人が話し
掛けてくる。「そうだね。ところで、
君はお地藏さんに向かい二回手を
打つて、お参りしていませんか。
神社と寺では参拝の仕方が違つぞ」と
私が言う。「はずかしいですよね。
穴の開いた柄杓があつたら入りたい
くらいです。それは無理。無理。」